

ベトナム語の字喃(chữ nôm)と 梵語音写用の漢字

石井 公成

1. はじめに

中国周辺の国では、模範的な漢文を熱心に学ぶ一方、漢字音の体系とは異なる自国の固有の言葉を漢字で何とか表記しようと試みてきた。朝鮮では吏読が生まれ、その略体も用いられた。日本では万葉仮名が使われ、漢字を素材とした平仮名・片仮名が発達し、また、「榊、辻、峠」などを初めとする国字も作られた。同じ漢字文化圏に属するベトナムにおいて、漢字を利用してベトナム固有の言葉を表そうとした試みが字喃(chữ nôm)である。字喃の成立については、陳朝仁宗の代(1278-1293)の韓詮、英宗の代(1293-1314)の阮士固などが、ベトナム語を多く用いた詩賦を作ったことから、13世紀末から14世紀初とするのが通説となっている。しかし、その根拠とされる『大越史記』には、

(韓) 詮能国語賦詩。我国賦詩、多用国語、実自此始。

(紹豊元年 [1282] 秋八月条)

命天章学士阮士固講五経。士固東方朔之流、善談諧、能作国語詩賦。我国作詩賦、多用国語、自此始。

(興隆十四年 [1306] 秋九月条)

と記されているにすぎない。すなわち、『大越史記』は、ベトナム語を多く盛り込んだ詩賦が作られるようになったのは韓詮からと述べ、また他の箇所では阮士固からと述べているだけなのである。阮士固の頃は、既に多くの人が「国語」を用いた詩を作るようになっていたことは、

朝野文人多借漢皇以昭君嫁匈奴事、作国語詩詞、風刺之。

(興隆十四年 [1306] 夏六月条)

という記述からも知られる。韓詮や阮士固に始まると言われるのは、この二人の作品が有名であって影響力が大きかったためと思われる。ベトナム独自の詩賦の形式が確立されるにともない、漢字によるベトナム語表記の方式が13世紀末から14世紀初めにかけて大幅に整備されたことは認めうるとしても、ベトナム語の表現を盛り込んだ漢字表記の詩や文を作ること自体は、13世紀末以前から行われていたと見るのが自然であろう。日本の場合を考えると、そうした詩が作られる前から地名・人名などを漢字で表記することが行われ、漢字によるベトナム語表記の方式がある程度まで発展していたことが推測される。字喃自体の起源を語る資料がないのは、字喃が長い年月をかけて成立したことを示すと見るべきではなかろうか。ただ、韓詮や阮士固の当時はどのような表記を用いていたのか、ベトナム独自の漢字が既に作られていたのか、陳朝以前の時期においてはどうであったのか、といった点は、残念ながら資料不足で明らかになっていない。すなわち、字喃の成立状況については、不明な点ばかりというほかないのである。

そこで、ここでは、字喃には漢訳仏典で用いられる梵語音写用の漢字が多く見られ、またそうした梵語音写用漢字と似た形式の字が次々に作られていることに着目し、字喃の成立および整備には、悉曇の知識を有し、仏典の「音義」類に通じた人々が関与していた可能性が高いことを指摘したい。そうした人々のうちに僧侶が含まれていたかどうかは判断できないが、漢代以降、長らく中国の支配下にあったベトナムでは、中国文化がかなり浸透していたものの、儒学を学んで官吏となった者の数は限られており、「漢字・漢文はむしろ仏僧の間に普及して」いたのであって、隋唐の仏教盛行の影響を受けて多くの高僧が出、詩文を能くしていた¹⁾うえ、「大越」を建国した李朝(1010-1225)の太祖自身、仏門の出身であり、1018年には中国から大藏経を取り寄せていることは無視しがたい。ベトナム語の漢字音について三根谷徹氏は、「唐代の軌範的な字音が伝えられ、おそらくは仏典のよみとしてそれがベトナム語の音韻体系に適合するように同化しながら固定した²⁾と推測されているが、ベトナム語における漢字音の基本部分が仏教を通じて導入された唐代音である可能性が高いことは、ベトナムにおける初期の漢字利用がどれほど仏教と関係深かったかを物語っている。

2. 梵語音写用漢字との共通性

字喃で書かれた作品を読んで、まず目につくのは、口偏の字が多いことであろう。たとえば、鄧陳琨(1710?-1745?)が出征兵士の妻の悲しみを歌い上げた漢詩

「征婦吟」と、女流詩人の段氏点 (1705-1746) がこれを「演音」、すなわち、ベトナム伝統の長編詩形である七七六八体の韻詩に訳したとされる字喃の「征婦吟曲」とを比べると、その違いは歴然とする。両者を校訂した竹内与之助氏のテキスト³⁾によって、本文から口偏の漢字を抜き出すと、「征婦吟」に見えるのは、

喧(3)、鳴(2)、啼(2)、吹(2)、呻、喔、嘆(2)、咨(4)、嗟(5)、唱(4)

という、いかにも内容にふさわしい10字にすぎず(「呻喔」は夜半孤閨に聞こえてくる鶏の鳴き声)、出現回数も26回にとどまるのに対し、「征婦吟曲」では、

啞(3)、啗(6)、吼(2)、囁、唉(2)、哈(3)、唏(5)、啣、噉(4)、唯(4)、噲、噤、噤、啞(2)、嘅(2)、叮、呖、嘽、嘸、吠、嘖、啞(3)、嘖、嘖、嘖、啞(5)、啞、嘖、嘖、吠、啞(6)、啞、嘖、啞、啞(2)、啞、啞(2)、啞(2)、啞(2)、啞、啞、啞、啞、啞(2)、啞、啞、啞、啞、啞(2)、啞、啞、啞、啞、啞(2)、啞、啞、啞、啞、啞

とあるように、字種が63字もあり、出現回数は102回に及んでいるうえ、

曲樂詞昭嘖啞啞

Khúc nhạc từ réo rất khong khen.

歌声に合わせた楽曲が鳴り響き、(夫の戦功を) ほめたたえることでしょう。

などのように、口偏の漢字を4字も続けている箇所すら見られる。しかも、これらの63字のうち、漢字そのままの意味で使われているのは「嘹叫啞吟」のみにすぎない。「啞(nói)」は本来の「どもる、口ごもる」ではなく、話すの意で用いられており、「唯」は「唯々(dôi dôi)」の形で2度用いられているが、隣の「佳」は「堆」の略体であるため、漢字の「唯」とは異なる。つまり、口偏は、ほとんどの場合、ベトナム語の発音を示すための漢字部分と組み合わせられ、その字が口に関する動作の語であることを示すか、さもなければ、その字が漢字の意味とは無関係な発音表記用の字であることを示す符合となっているのである。

字喃において、口偏がこうした用途で、特に発音表記用の字であることを示す目的で多く用いられていることは、聞宥氏が早くに指摘している。聞宥氏は、口

偏を「syllabic signs 之表徴」として用いることには先例があるとし、仏典を翻訳した際、中国には無い ra の発音を表すために囉を、また tha の発音を表すために𠵼の字をあてたりしたことをあげる。そして、高麗時代の石塔記が𠵼を mek の音写としているという前間恭作氏の報告を紹介し、『遼史』以下では、ウラルアルタイ諸語を表記するために、しばしばこうした方法を用いていると説いている。また、音写語である「英吉利（イギリス）」や「荷蘭（オランダ）」を明清以降は「𠵼𠵼𠵼」や「𠵼𠵼」に作って「英」や「荷」の本来の意味とは異なることを示している例をあげ、字喃は囉や𠵼のようなグループでなく、後のグループに属すると論ずる。聞宥氏は、梵語音写用漢字だけでなく、明代の俗字や粵方言などにも口偏によって制限を示す漢字が多いとし、そうした例をあげている⁴⁾。

聞宥氏のこれらの指摘は、きわめて重要なものと言うことができる。字喃に口偏の字が多いことは、ベトナム人がベトナム語の発音に近い漢字に口偏を付けて新たな字を作るという方法、ないし口偏の漢字をベトナム語表記の手段として転用するという方法を確立することによって、次々に字喃を増大してゆけるようになったことを示すものであり、その人たちが字喃を発音表記文字の方向へ大きく押しやったことを示しているからである。

ここで注目されるのが、聞宥氏が字喃とは性格が異なるとする囉の類の梵語音写用漢字⁵⁾が、字喃の中になりに見受けられることであろう。実際のところ、氏が囉の類とは異なる例としてあげた𠵼にしても、不空訳『大樂金剛不空真実三摩耶經』般若波羅蜜多理趣品に「𠵼𠵼」(hri) (大正大藏經8巻、785頁上段2行)とあるのを初めとして、陀羅尼の音写にはしばしば用いられている。諸橋『漢和大辞典』は、この「𠵼」については宋代編集の『集韻』から「𠵼、声也」という説明を載せるにとどまっているが、これは、仏典の調査が足りないためにほかならない。「征婦吟曲」の口偏の字について言えば、「𠵼」は𠵼の略体であるが、この𠵼も唐般若三藏訳『大乘理趣六波羅蜜多經』に3例見えている(大正大藏經8巻、873頁上段27行、同下段24行、874頁中段13行)のを初めとして、唐代の漢訳中では陀羅尼の音写としてしばしば使われている。

このほかにも、『大漢和字典』が『集韻』ないしそれ以後の韻書に典拠を求めるのみで着実な用例や意味を示せずにいる字にしても、実際には唐代やそれ以前から梵語音写用として盛んに使われ、かつ字喃としても用いられている例は、𠵼、𠵼、𠵼、𠵼を初めとして数多くある。

さらに、『大漢和辞典』にも収録されていない字で、梵語音写用漢字として、ま

た字喃として用いられている例も下のようによく見られる。

囉：部囉薩利（隋三藏閣那崛多共笈多訳『添品妙法蓮華
經』陀羅尼品第三十一（大正大藏經9巻、187頁中段7行）

囉：吠囉者娜野（唐不空訳『仁王護国般若波羅蜜多經』巻
下、大正大藏經8巻、843頁下段21行）

囉：囉日囉_{二合}那_引囉_引野拏囉_{一合}
咩_引囉日囉_{二合}鉢多_引計_引囉_{一合}（宋法賢訳『仏説最上根本大樂不空三昧大教王
經』巻第四、大正大藏經8巻807頁上段14-15行）

3. 複子音表記の字喃と梵語音写の二合字

これまで見てきた口偏の字喃の中には、他の漢字の組み合わせによって成立した字を簡略して口偏を付けるようになったものも含まれているうえ、口偏をつけて字を作る方式が確立されていれば、こうした簡単な構造の字はいくらでも作ることができるため、梵語音写用漢字が字喃に取り込まれたものと断定することはできない。しかし、漢字音の体系とは異なる言葉を漢字によって音写しようとする場合、まず参考にするのは、中国正史のうち、中国周辺民族について記述した箇所に見られる音写の例や、豊富な用例がある仏教の梵語音写用漢字であろう。ついでながら、『大日経』字輪品には「唵唵囉囉」（大正大藏經18巻、30頁中段左3行）とあって、口偏の音写漢字が4字連続している例が見える。

実際、日本の場合、『古事記』や推古朝の遺文が「彌、羅」の字を多く用いるのは、富樓那彌多羅尼子、彌勒菩薩、阿彌陀、彌樓山、などの仏教の用例にならった可能性が高いという⁶⁾。また、築島裕氏は、奈良時代の写本である『金光明最勝王経』巻第四と『大毗盧遮那経』巻第一に見える陀羅尼の字母と万葉仮名を比較し、前者については字母数105のうち44、約4割強が共通しており、後者については、56字母のうち、おなじく約4割に当たる25字母が共通することを指摘し、この種の文献が万葉仮名の大きな源泉となったと推測されている⁷⁾。現存する僅かな写本についてさえこうした共通性が見られる以上、実際には共通する部分はもっと多かったと考えるべきであろう。すなわち、万葉仮名の作成には、悉曇の素養がある人々がかなり関わっていたのである。冒頭で触れたベトナムの歴史状況を考慮すると、ベトナムの場合も事情は同様ではなかったかと考えられる。

この推測を助けるのが、17世紀以前の文献に見える複子音を有する字喃であ

る。Maspero は、フランスの宣教師、Rhodes 師がポルトガル宣教師が作成した辞書を参照して1651年に刊行したベトナム語トンキン方言の辞書に見える発音やベトナム周辺民族の発音に基づき、ベトナム語にはかつては bl、kl、tl、という語頭の複子音が存在し、それが現在のベトナム語の単子音に変化していったのだと説いた⁸⁾が、17世紀以前の文献に見える複子音の語の字喃は、漢字としてはかなり不格好な字を含んでいる。以下、NGUYEN Phu Phong 氏のあげている例⁹⁾を、一覧表の形式を多少変更して示す。(a)は字喃、(b)はその字の構成、(c)はその字が作成された当時の推定音、(d)はその変化形の推定音、(e)は Rhodes 師の表記、(f)は現代ベトナム語の表記である。

(a)	(b)	(c)	(d)	(e)	(f)
𣎵	巴 ba + 賴 lai	:		blai	traï
𣎶	巴 ba + 凌	:		blang	trang
𣎷	古 co + 弄 long	:	*klong	tlong	trong
𣎸	巨 cu + 侖 luan	:	*klon	tlon	tron
𣎹	巨 cu + 僚 lieu	:	*kleo	tleo	treo
𣎺	巨 cu + 郎 lang	:	*klang	*krang	sang
𣎻	巨 cu + 立 lap	:	*klap	*krap	sap
𣎼	巨 cu + 稟 lam	:	*klam	*kram	sam

これらの特徴は、「𣎵 giêng (正月)」のように、意味ある漢字を組み合わせて作った字喃とは反対に、音のみを組み合わせている点である。組み合わせに当たっては、一方の字の頭子音と、頭子音を有するもう一方の字の音全体を結びつけていることが注意されよう。すなわち、「東」の音を示す場合、「徳紅切」と表記して上の字の頭子音（声母）と下の字のうち頭子音以外の部分（韻母）を組み合わせて発音を表記する反切とは異なるのであり、複子音を表記するための工夫がなされているのである。反切の起源については、インドの悉曇学の影響と見る説、中国固有のものと見る説、中国にもともとあった形式が悉曇学の影響で整備されたと見る説など、諸説があって論争が続いている¹⁰⁾が、複子音を表記する上記のような方式は vajra (金剛) を「囉日囉_{上合}」と表記するような梵語音写法を手本としており、中国以外に起源を有することは疑いない。悉曇における字母自体、『華嚴經』入法界品の四十二字門に見られる「娑囉 (sva)」のように、子音が続く二合字を

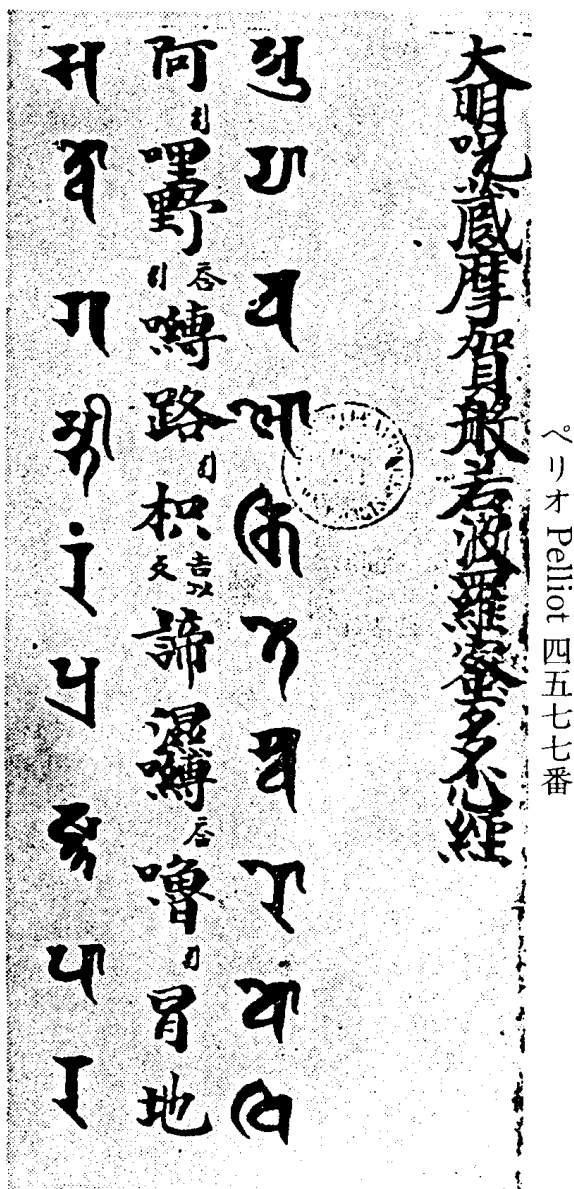
採用しているものがあることは、よく知られている¹¹⁾。ベトナム語の発音の基本的な構成を考えようとする場合、こうした悉曇の字母を参考にするのはきわめて当然なことである。

なお、字喃になじんでいない漢字文化圏の人間が左の一覧を見た場合、同様の例として示されている粘や矩と違い、縦長のやや不格好な形になっている字が多いのはなぜか、という疑問がわいてこよう。一字や二字のことではないのだから、画数が少なく、かつ通常の漢字と混同されにくい漢字であって、しかも縦に重ねた場合落ち着きのよい字を選ぶべきだったのではなかろうか。ここで考えられるのは、これらの字は、もともとは縦書きで書かれていた別々の字が慣用によって合成されるに至ったのではないかということである。

梵字の横に漢字を書いて発音を示した文献 (Pelliot 4577) などでは、左図¹²⁾に見るように、

阿 _引	哩野 _{引合}	嚩路 _引	枳 _良	諦
ā	ryā	va lo	ki	te
濕嚩 _{二合}	嚕 _引			
śva	lo			

と表記されており、「哩野」や「濕嚩」などの二合字は密着して書かれている。誤写かもしれないが、密着して書かれた二合字が合成字となる可能性があることは、「嚩日囉」を「嚩囉_{二合}」と表記している例が宋施護訳『仏説帝釈般若波羅蜜多心経』(大正大蔵経8巻、847頁中段11行)に見えることから推察できる。こうした密着書きはしていなかったとしても、ベトナムでは、blaiのような複子音の語を「巴頼」と二字によって縦書きで表記していた時期があったのではなかろうか。これは推測に止めるほかないが、そうし



ペリオ Pelliot 四五七七番

た表記があったにせよ、いきなり複子音を表記する合成字が作られたにせよ、そのような表記を工夫した人たちが、梵語音写用漢字に関する深い知識を持っていたであろうことは確かである。

注

- 1) 三根谷徹『中古漢語と越南漢字音』、汲古書院、1993年、201頁、385-6頁。
- 2) 同、388頁。
- 3) 竹内与之助『征婦吟曲』、大学書林、1984年。
- 4) 聞宥「論字喃之組織及其与漢字之交涉」、『燕京学報』14期、1933年、232-234頁。
- 5) 漢訳仏典の原テキストはいわゆる梵語やパーリ語のみとは限らず、仏教混淆梵語や西域諸語、インドの地方言語などを含んでいることはよく知られているが、ここでは便宜上、梵語音写という言葉で表記する。
- 6) 神田秀夫「『古事記の文体に関する一試論』補説——所謂推古朝遺文に於ける古事記的文体の萌芽」、「国語と国文学」昭和25年8月号。
- 7) 築島裕「古代の文字」、中田祝男編『講座国語史2 音韻史・文字史』、大修館書店、1972年、370-371頁。万葉仮名については、吏読との関係を考える必要がある。姜斗興『吏読と万葉仮名の研究』（和泉書院、1982年）参照。
- 8) Henri Maspero: Etude sur la phonetique de la langue annamite, BEFEO XII, Hanoi, 1912.
- 9) A PROPOS DU NÔM, ECRITURE DEMOTIQUE VIETNAMIENNE: Cahier de linguistique asie orientale, No. 4, 1978.
- 10) 諸説については、大島正二『中国言語学史』、汲古書店、1997年142-147頁。
- 11) 各種の字母については、馬淵和夫『増訂 日本韻学史の研究I』第一章「インド・中国における悉曇学」（臨川書店、1984年）に列挙されている。慶谷壽信「『字母』という名称をめぐって」（『日本中国学会報』第33集、1981年10月）参照。
- 12) Pelliot 4577番。福井文雅『般若心経の歴史的研究』、春秋社、1987年、104頁。
- 13) Kauśika-prajñāpāramitā, Mahāyānasūtrasaṃgraha pt.1, Buddhist Sanskrit Texts, No. 17, The Mithila Institute, Darbhanga, 1961, p. 96. 梵語テキストについては、苜米地等流氏のご教示による。

【付記】

著者が字喃について調べるようになったのは、漢訳仏典をコンピュータ入力する際、諸橋『大漢和辞典』に収録されていない梵語音写用の漢字の一部が字喃のうちに存在していたためにほかならない。字喃を含めた8万字の漢字の検索・表示ソフトである「今昔文字鏡」（エーアイ・ネット）を作成し、この調査のきっかけを作ってくさった文字鏡研究会の古家時雄氏、そして、関連論文についてご教示くださった古屋昭弘氏、谷本玲大氏に御礼申しあげる。